

主な食品健康影響評価について
(平成 28 年 3 月 10 日～7 月 19 日)

<プリオン>

- 健康と畜牛の BSE 検査について (食品安全委員会 第 614 回 平成 28 年 7 月 12 日)

健康と畜牛の BSE 検査について、現在実施している 48 か月齢超の検査を継続した場合と廃止した場合のリスクの差は非常に小さく、人への健康影響は無視できる、と判断した。

一方、家畜への BSE の感染防御には、飼料規制が極めて重要であり、飼料規制の実効性が維持されていることを確認できるよう、死亡牛等の高リスク牛を対象とした BSE 検査により、BSE の発生状況を引き続き確認することが必要である。

また、引き続き、全てのと畜される牛に対すると畜前の生体検査が適切に行われ、24 か月齢以上の牛のうち、生体検査において、神経症状が疑われたもの等の BSE 検査が行われる必要がある。

以上の評価 (案) について、8 月 11 日までパブコメを募集している。

<薬剤耐性菌>

- 家畜等に使用するバージニアマイシンによる薬剤耐性菌について (評価結果通知日：平成 28 年 5 月 24 日)

抗菌性飼料添加物であるバージニアマイシンが鶏や豚に使用された場合に、薬剤耐性の腸球菌が選択され、畜産食品を介してヒトがばく露され、ヒト用抗菌性物質による治療効果が減弱等する可能性は否定できず、リスクの程度は中等度であると考へた。

鶏及び豚由来腸球菌のバージニアマイシンに対する低感受性菌の割合が 2007 年以降低いことについて、使用量の減少が影響している可能性が考へられた。現時点で、国内でのバージニアマイシンの使用実態はないと考へられるが、今後、使用された場合に薬剤耐性率が上昇する可能性は否定できない。

<農薬>

- 除草剤グリホサートについて (評価結果通知日：平成 28 年 7 月 12 日)

アミノ酸系除草剤であるグリホサートについては、複数の原体製造業者から試験成績等が提出されたことから、食品安全委員会は、これらを総合的に判断し、グリホサートの食品健康影響評価を行った。また、本剤の発がん性については、昨年春より国際的に議論が行われてきたことから、農薬専門調査会は、これらの機関が参照した資料等も踏まえつつ、議論を行った。

各種毒性試験結果から、グリホサート投与による影響は、主に体重 (増加抑制)、消化管 (下痢、盲腸重量増加等) 及び肝臓 (肝細胞肥大等) に認められた。神経毒性、発がん性、繁殖能に対する影響、催奇形性及び遺伝毒性は認められなかった。各試験結果から、一日摂取許容量 (ADI) を 1 mg/kg 体重/日と設定し、急性参照用量については設定する必要がないと判断した。

<その他>

上記の他、期間中、添加物（91件）、農薬（20件）、遺伝子組換え食品等（10件）、肥料・飼料等（2件）、動物用医薬品（1件）、器具・容器包装（1件）、汚染物質等（1件）及び薬剤耐性菌（1件）について評価を終了し、結果をリスク管理機関に通知した。